

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和5年10月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万4706トン、前年同月比90.6%、価格は1キログラム当たり308円、同125.1%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は4万トン、前年同月比91.7%、価格は1キログラム当たり274円、同121.2%となった。
- 12月は、暖冬による大幅な前進により品薄となる不安があるため、価格は平年より堅調な展開が予想される。

(1) 気象概況

上旬は、北日本では、一時的に低気圧や低気圧通過後の寒気の影響を受けやすかったことで、6日には大荒れとなった所があった。東・西日本では天気は周期的に変わり、8日から9日にかけて本州南岸を通過した低気圧の影響で大雨となった所もあった。旬降水量は、北日本日本海側でかなり多く、東日本日本海側で多かった。一方、西日本日本海側で少なく、北・東・西日本太平洋側、沖縄・奄美では平年並だった。北・東・西日本で長く続いていた気温のかなり高い状態は、偏西風の南下により解消し、旬平均気温は、東・西日本では平年並だったが、日本近海の海面水温が顕著に高い影響を受けやすかった北日本では高かった。旬間日照時間は、東・西日本日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美で少なく、北日本日本海側、北・東日本太平洋側では平年並だった。

中旬は、北日本では、旬の前半は移動性高気圧に覆われ晴れた所が多かったが、後半は、北日本日本海側を中心に低気圧や上空の寒気の影響を受けやすく、15日には、本州南岸を通過した低気圧の影響で東日本太平洋側では大雨となった所があり、20日頃は、北日本を中心に低気圧の影響で大雨となった所があった。このため、旬降水量は、北・東日本日本海側で多く、西日本日本海側、西日本太平洋側と沖縄・奄美で少なかった。北・東日本太平洋側では平年並

だった。旬間日照時間は、東・西日本で移動性高気圧に覆われて晴れた所が多かったため、全国的に多く、東日本日本海側と北・東日本太平洋側でかなり多かった。旬平均気温は、オホーツク海付近を進む低気圧に流れ込む暖かい空気に覆われた時期があったことや、寒気の影響が一時的だった北日本で高く、東・西日本と沖縄・奄美では平年並だった。

下旬は、全国的に高気圧に覆われ晴れた所が多くなり、旬間日照時間は、全国的に多く、北・西日本日本海側と北・東・西日本太平洋側でかなり多かった。1961年の統計開始以降、10月下旬として、東日本太平洋側（平年比156%）、西日本日本海側（平年比157%）、西日本太平洋側（平年比162%）では1位の多照となった。北・東日本を中心に27日から28日にかけて大雨となった所があったことや、東日本日本海側では、一時的に低気圧や低気圧通過後の寒気の影響を受けやすかったため、旬降水量は、東日本日本海側で多かった。一方、東・西日本太平洋側でかなり少なく、北・西日本日本海側と北日本太平洋側、沖縄・奄美で少なかった。旬平均気温は、寒気の影響が一時的だった北日本で高く、寒気の影響を受けやすかった西日本で低かった。東日本と沖縄・奄美では平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り（図1）。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側				
東日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		
西日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側				

資料：気象庁「10月の天候」

1 平年を上回る水準

2 平年並み

3 平年を下回る水準

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は11万4706トン、前年同月比90.6%、価格は1キログラム当たり308円、同125.1%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向 (10月速報)

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	114,706	90.6	86.7	308	125.1	130.2	309	321	296
だいこん	10,032	87.2	87.7	135	136.9	144.2	154	149	111
にんじん	6,813	90.8	81.5	217	125.0	159.2	212	224	214
はくさい	13,928	92.1	83.2	108	136.8	146.6	107	129	89
キャベツ類	15,079	87.2	85.8	118	157.7	145.8	119	118	116
ほうれんそう	1,230	91.0	92.5	686	113.3	116.3	880	754	562
ねぎ	4,220	78.4	80.0	547	152.5	155.0	616	604	449
レタス類	8,113	100.8	98.2	219	108.2	132.4	190	247	223
きゅうり	5,109	98.9	90.1	438	119.2	124.1	423	518	383
なす	2,601	103.1	97.3	373	111.6	105.5	366	396	360
トマト	3,226	63.8	58.5	844	158.6	175.3	726	1,060	819
ピーマン	1,934	91.3	90.3	608	166.2	152.1	597	569	653
さといも	1,031	104.1	101.1	329	98.8	104.0	349	335	309
ばれいしょ	6,733	92.8	92.8	128	116.9	104.2	127	127	129
たまねぎ	8,876	93.8	90.8	127	121.9	132.7	113	123	145

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、入荷量減から堅調な動きとなり、大幅に高かった前年を2割以上上回り、平年を6割近く上回った(図2)。

葉茎菜類は、キャベツの価格が、月間を通して堅調な推移となり、前年を6割近く上回り、平年を4割以上上回った(図3)。

果菜類は、トマトの価格が、連休明けに暴騰

し、高めに推移した前年を6割近く上回り、平年を7割以上上回った(図4)。

土物類は、たまねぎの価格が、数量不足から堅調な推移となり、高めに推移した前年を2割以上上回り、平年を3割以上上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

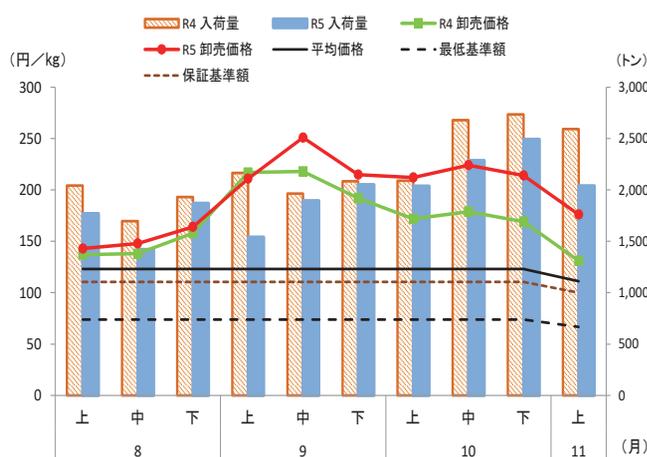


図3 キャベツの入荷量と卸売価格の推移

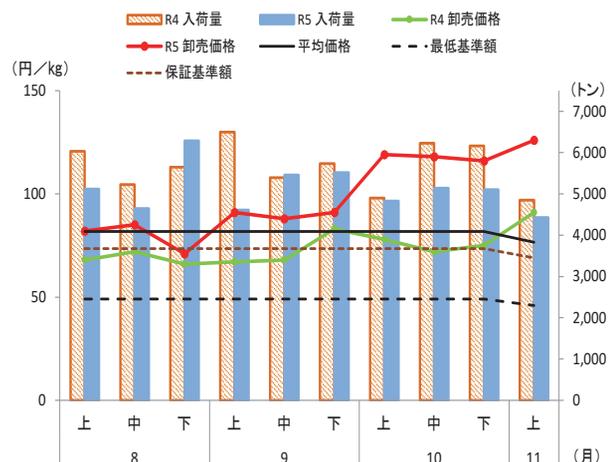


図4 トマトの入荷量と卸売価格の推移

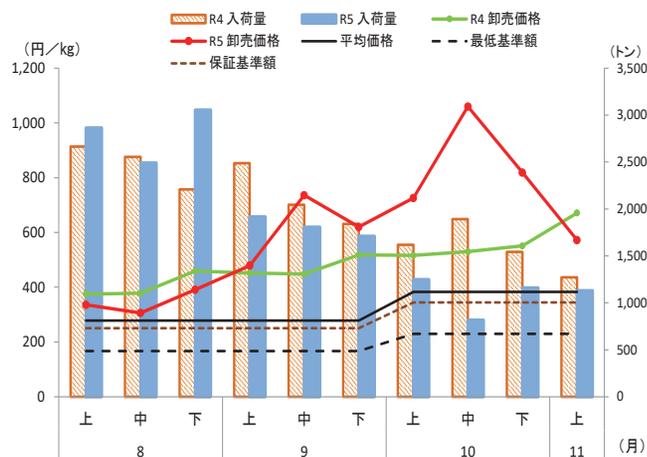
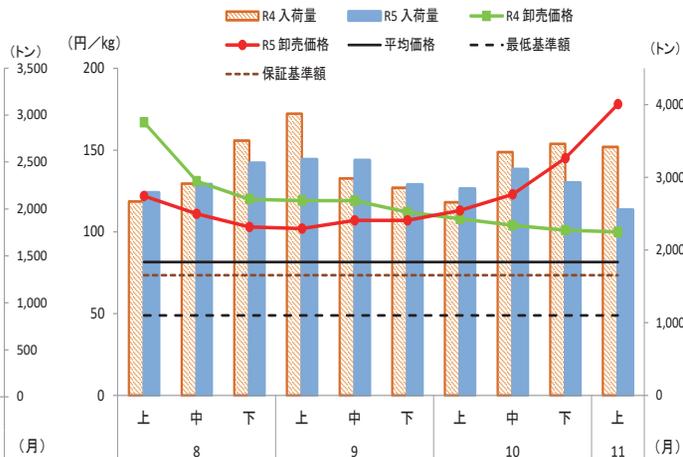


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。

※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。

※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	10月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	千葉産を中心に青森産、北海道産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、播種時の猛暑、乾燥の影響により播き直しがされた圃場もあったが、生育はおおむね順調であった。青森産の作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響から回復傾向にはあったものの、病害が多く、正品率が低下していた。北海道産の作付面積は前年並みで、やや前進傾向であったが、高温による肥大停滞、軟腐病の発生が散見された。総入荷量は前年、平年とも1割以上上回った。 価格は下旬に向けて落ち着きをみせたものの、前年を3割以上上回り、平年を4割以上上回った。
	にんじん 	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、低温と日照不足の影響により生育は停滞した。その後的高温・干ばつ傾向の気候により、細物傾向で品質不良も多く、残量も少なかった。後続の千葉産、埼玉産はシーズン序盤のため出荷量が少ない。中国産の輸入が前年を9割近く上回っている。総入荷量は少なかった前年を1割近く下回り、平年を2割近く下回った。 価格は、入荷量減から堅調な動きとなり、大幅に高かった前年を2割以上上回り、平年を6割近く上回った。
葉茎菜類	はくさい 	長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、概して高温・干ばつだった影響により、シーズンの終盤に向かって漸減した。後続の茨城産は8～9月の高温および台風の影響により遅れている。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を2割近く下回った。 価格は、茨城産の出荷開始に伴い下旬に落ち着いたものの、前年を3割以上上回り、平年を4割以上上回った。
	キャベツ類 	群馬産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響および局地的な多雨により、品質低下が散見された。後続の千葉産、茨城産も高温により定植と生育の遅れが見られる。総入荷量はやや多かった前年を1割以上下回り、平年を1割以上下回った。 価格は、月間を通して堅調な推移となり、前年を6割近く上回り、平年を4割以上上回った。
	ほうれんそう 	群馬産を中心に茨城産、栃木産の入荷があった。群馬産の作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響により作柄はやや不良で、虫害も多発している。茨城産の作付面積は前年並みで、8～9月の高温および多雨の影響により播種や生育が遅延した。栃木産の作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響が見られたが、10月に入って夜温が低下したことから品質は回復し、生育もやや落ち着いている。総入荷量は下旬に向け回復したものの、前年、平年ともかなりの程度下回った。 価格は、数量が増加した下旬に下がったものの、前年、平年とも1割以上上回った。
	ねぎ 	北海道産、青森産、秋田産を中心に後続の関東産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、高温により生育が停滞した。青森産の作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響により軟腐などの病害が多く、細物傾向となった。秋田産の作付面積は前年並みで、7月の大雨、8月の高温・干ばつにより生育が停滞した。9月に回復傾向となったものの、不作傾向である。関東産の作付面積は前年並みだが、茨城産のみ前年をやや下回る。夏場の高温の影響により全体的に生育は遅延し、虫害も散見された。総入荷量はやや多かった前年を2割以上下回り、平年を2割下回った。 価格は、中旬までは大幅な高値が続き、下旬より高値反動で下げに転じたが、前年、平年とも5割以上上回った。
	レタス類 	茨城産を中心に長野産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、生育はおおむね順調だが、8月の高温・干ばつの影響により定植、生育遅れが散見された。長野産の作付面積は前年並みで、中旬までにはほぼ切り上がった。後続産地も高温の影響は見られる。総入荷量はやや少なかった前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。 価格は、長野産が切り上がった中旬以降に回復し、高めに推移した前年をかなりの程度上回り、平年を3割以上上回った。
果菜類	きゅうり 	群馬産、埼玉産中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年並みで、高温の影響により品質低下が見られるほか、虫害の発生が散見されている。埼玉産の作付面積は前年並みで、高温の影響により果形が短い傾向となった。定植時から虫害が続き、病害も散見されている。後続の宮崎産、高知産の生育はおおむね順調であった。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割弱下回った。 価格は、中旬に高騰した影響もあり、やや高めに推移した前年を2割近く上回り、平年を2割以上上回った。
	なす 	高知産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、気温が高く日照にも恵まれたため生育は3～4日程度前進した。病害は見られないが虫害の発生が多い。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をわずかに下回った。 価格は、関東産の樹勢低下による落ち着きから堅調な動きとなり、安かった前年を1割以上上回り、平年をやや上回った。
	トマト 	千葉産、熊本産を中心に福島産、茨城産などの入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、定植以降の高温・干ばつにより着果不良や裂果が見られ、小玉傾向となった。熊本産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も、若干の遅れが散見された。福島産の作付面積は前年並みで、高温による小玉傾向に加えて病虫害の発生が多い。茨城産の作付面積は前年をかなり下回り、加えて夏場の高温の影響で生育の遅れや品質低下が顕著となった。総入荷量は前年を4割近く下回り、平年を4割以上下回った。 価格は、連休明けに暴騰し、高めに推移した前年を6割近く上回り、平年を7割以上上回った。

	 ピーマン	<p>茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、8~9月の高温の影響により、生育が遅延した。病害も散見されており、作柄はやや不良であった。後続の高知産はおおむね順調も、9月の高温でやや徒長気味で、虫害もやや多い。総入荷量は前年を1割近く下回り、平年を1割弱下回った。</p> <p>価格は月間を通して堅調な推移となり、前年を6割以上上回り、平年を5割以上上回った。</p>
土物類	 さといも	<p>埼玉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、高温・干ばつ^{かんすい}の影響により、灌水ができていない圃場とそうでない圃場の差が大きい。灌水が十分にできている圃場についてはやや早い出荷となっているが、肥大はまだ進んでいない。品質はおおむね良好。総入荷量は前年をやや上回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>価格は高めに推移した前年をわずかに下回り、平年をやや上回った。</p>
	 ばれいしょ	<p>北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響によりやや小玉傾向となった。品質劣化が見られ、各品種で発芽が多発している状況である。総入荷量は前年、平年ともかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、安めに推移した前年を1割以上上回り、平年をやや上回った。</p>
	 たまねぎ	<p>北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、生育はやや前進傾向も、高温・干ばつの影響により中晩生品種の作柄が悪く、数量が伸びなかった。中国産の輸入は前年を4割以上上回った。総入荷量は前年をかなりの程度下回り、平年を1割近く下回った。</p> <p>価格は、数量不足から堅調な推移となり、高めに推移した前年を2割以上上回り、平年を3割以上上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は4万トン、前年同月比91.7%、価格

は1キログラム当たり274円、同121.2%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(10月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	40,000	91.7	89.0	274	121.2	128.7	265	280	275
だいこん	3,347	78.9	74.2	144	128.6	143.1	147	148	136
にんじん	3,065	97.2	97.0	223	132.7	168.0	215	237	217
はくさい	6,382	91.1	89.3	109	131.3	149.6	101	135	90
キャベツ類	5,377	90.8	88.8	116	143.2	139.1	112	111	125
ほうれんそう	391	96.8	84.0	803	105.9	111.1	937	842	705
ねぎ	967	80.1	83.3	646	142.0	137.4	669	694	586
レタス類	1,438	95.9	75.5	248	106.4	147.4	219	281	243
きゅうり	1,120	99.7	94.8	430	117.2	125.3	392	518	390
なす	717	95.4	106.6	363	100.0	106.3	345	374	368
トマト	1,002	72.7	65.8	835	145.5	165.5	705	1,011	843
ピーマン	475	88.4	86.9	620	153.5	149.2	592	619	648
さといも	183	97.6	89.6	331	106.1	107.7	347	333	318
ばれいしょ	2,777	89.0	96.6	111	115.6	100.3	108	111	112
たまねぎ	5,421	111.6	107.7	126	111.5	127.3	115	121	141

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	10月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	月の前半は北海道産と青森産が主体となり、後半は新潟産と石川産が主体となる入荷であった。北海道産は夏場の気温高の影響による生育不良から品質低下品が多く、傷みや腐りも多発して出荷できないものも多く、入荷量は前年の3分の1程度にとどまった。後続の新潟産や石川産も夏場の気温高と干ばつの影響により出遅れ、入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年、平年とも大幅に下回った。 価格は、絶対量不足の中で高値推移となったが、品質低下品も多く見られたことから、伸び悩む場面もあった。月間では前年を3割近く上回り、平年を4割以上上回った。
	にんじん 	北海道産の入荷があった。十勝産が不作の上、小玉傾向で箱数が伸びず、入荷量減となった。特に中旬の入荷量が少なく、前年を大幅に下回ったほか、上旬の入荷量も前年をかなり下回った。国産の不足感から業務用関係を中心に輸入の中国産へとシフトし、前年の2倍以上の入荷量があった。月間全体では前年をわずかに下回り、平年をやや下回った。 価格は、絶対量不足から高値推移となった。中旬にピークとなり、月間でも前年を3割以上上回り、平年を7割近く上回った。
葉茎菜類	はくさい 	長野産が中心となり、下旬には後続の茨城産の入荷も始まった。長野産は干ばつの影響により上旬から中旬にかけての入荷量が伸びず、前年を大幅に下回ったが、下旬には生育が回復して増量し、前年をかなり上回った。しかし月間では前年を下回った。茨城産は出遅れ気味で入荷量は前年を大きく下回った。月間全体では前年、平年ともかなりの程度下回った。 量販店での鍋商材の売場展開が始まる時期に不足感が生じたため、上旬から中旬にかけては価格が高騰した。下旬には入荷増に伴って下落したが、月間では前年を3割以上上回り、平年を5割近く上回った。
	キャベツ類 	群馬産を中心として、この時期の主体の長野産と後続の茨城産の入荷もあり、愛知産も中旬以降に始まった。群馬産は例年に比べて切り上がりが早く、中旬以降の入荷量が激減し、下旬は前年の半量以下となった。月間でも前年をかなり下回った。長野産も干ばつの影響により全旬とも入荷量が少ない中、下旬には切り上がり、月間では前年を大幅に下回った。愛知産は生育遅れから中旬の入荷量が伸びなかったが、下旬に増量となり、月間では前年を若干上回った。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は、品薄感から高値推移となり、全旬とも前年を大きく上回った。月間でも前年を4割以上上回り、平年を4割近く上回った。
	ほうれんそう 	岐阜産が中心の入荷となり、秋冬産地の福岡産や徳島産も中旬以降に始まった。各地とも猛暑の影響が大きく、生育不良から産地出荷量は伸びず、特に徳島産と群馬産は前年の半量以下になるなど、他産地も少ない状況が続いた。後続産地が始まったため、全体的には旬を追うごとに入荷増傾向ではあったが、月間では前年をやや下回り、平年を大幅に下回った。 価格は、量販店からも業務用筋からも発注が多く、引き合いが強い中で、絶対量不足から高値推移となった。入荷増量に伴って下落傾向になったものの、月間では前年をやや上回り、平年をかなり大きく上回った。
	ねぎ（白ねぎ） 	長野産が中心となり、北海道産や鳥取産の入荷もあった。長野産は干ばつと極端な気温高の影響により生育が悪く、全旬とも入荷量が少なかった。旬を追うごとに入荷増傾向ではあったが、月間では前年を大幅に下回った。鳥取産も入荷量が少なく、全旬とも前年の3分の1程度で、月間全体でも前年を大幅に下回った。 価格は、絶対量不足に加え、量販店で鍋商材の売場展開が始まったことから引き合いが強くなり、上旬から中旬にかけては高単価が続いた。下旬の入荷量が回復の兆しをみせたことから、価格は下落したが、月間では前年を大幅に上回った。
	ねぎ（青ねぎ） 	香川産と徳島産が主体となり、高知産や近隣産地の大阪産、奈良産などの入荷があった。この時期の主力である徳島産が猛暑の影響により生育不良で、全旬とも入荷量が少なく、月間では前年を大幅に下回った。香川産は高単価の影響もあって前年より潤沢な入荷が続き、旬を追うごとに増加傾向で、月間でも前年を上回った。他産地も前年より入荷増となったところが多く見られ、全体としては旬を追うごとに入荷増傾向ではあったが、主産地が少なかったことにより、月間全体では前年をかなり下回った。 価格は、絶対量不足から高値推移となり、量販店、業務関係ともに引き合いが強かったことから、入荷増傾向の中でも下落せず、月間では前年を5割以上上回った。
	レタス類 	玉レタスは月の前半は長野産が中心となり、後半は後続の茨城産や兵庫産が主体となる入荷であった。長野産は例年に比べて切り上がりが早く、中旬以降は前年の半量以下となった。後続の産地は出遅れから上旬に入荷がなく、中旬以降の出回りとなったが、長野産の切り上がりが早かったため全体としては入荷量が伸びず、中旬は前年を大幅に下回り、月間全体でも前年をかなり下回った。サニーレタスは月の前半は長野産が中心となり、後半は福岡産が中心となった。長野産の切り上がりが例年よりも早く、中旬以降に入荷量が激減し、月間では前年をかなり下回った。福岡産は順調なスタートとなり、月間では前年を大きく上回ったが、全体では前年並みだった。リーフレタスは福岡産が中心となり、長野産の切り上がりが例年よりも早く、上旬の入荷量は前年の半量程度で、中旬には切り上がったため月間の入荷量は前年の3分の1程度となった。福岡産が順調なスタートとなり、旬を追うごとに入荷量は微増傾向となったが、月間全体では前年をやや下回り、平年を2割以上下回った。 価格は、レタス類全体的に中旬に端境が生じたため上昇し、月間でも高かった前年をかなりの程度上回り、平年を4割以上上回った。

果菜類	きゅうり 	<p>大阪産、宮崎産、群馬産が主体となり、上旬までは福島産の残量入荷もあった。猛暑の影響により生育が悪く、群馬産の入荷量は全旬とも少なく、月間でも前年を大きく下回った。宮崎産の秋冬産地も出遅れ気味で、中下旬の入荷量が伸び悩んだ。大阪産は順調なスタートで、月間では前年をかなり上回った。月間全体では前年並みで、平年をやや下回った。</p> <p>夏秋産地の入荷量が少なく、後続の主力の宮崎産の出遅れから品薄感が生まれた中、日中の気温がまだ高い日があったため特売需要も多く、中旬に価格が高騰した。下旬には後続産地が始まったこと、高値疲れが出て需要が落ち込み、価格は急落したが、月間では前年、平年とも大幅に上回った。</p>
	なす 	<p>千両系は高知産と京都産が主体となり、長なすは愛媛産と熊本産、後続の福岡産も主体となる入荷であった。夏秋産地は酷暑の影響により産地残量が少なく、京都産や上旬の高知産の入荷量は伸び悩んだ。千両系、長なすとも、中旬以降の後続産地は順調な入荷となり、なす全体としては旬を追うごとに入荷増傾向となった。月間全体では前年をやや下回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は、夏秋産地の中旬の入荷量が不安定であったこと、後続産地が出遅れ気味であったことが影響し、また日中の気温高が続いたため引き合いもあり、中旬に上伸したが下旬には落ち着いた。月間では前年並みで、平年をかなりの程度上回った。</p>
	トマト 	<p>岐阜産が中心となり、ほか夏秋産地の岡山産、愛媛産、熊本産や、後続の愛知産などの入荷があった。夏秋産地は猛暑の影響により作の終盤の着果が悪かったことから、各産地とも切り上がりが早く、後続産地も生育初期の生育不良から出遅れ、中旬には端境が生じた。全旬とも入荷量は少なく、月間でも前年を3割近く下回り、平年を3割以上下回った。</p> <p>価格は、品薄感から高値推移となり、特に端境となった中旬には高騰した。月間でも前年を4割以上上回り、平年を6割以上上回った。</p>
	ピーマン 	<p>秋冬産地の高知産が中心となり、茨城産や宮崎産、愛媛産なども主体となる入荷であった。茨城産は産地出荷量が少ない影響により関西方面への出回りが少なく、特に端境期となった中旬に入荷量が激減した。後続産地の高知産や宮崎産なども生育期の猛暑の影響により活着が悪く、生育が遅れ入荷量は伸び悩んだ。夏秋産地の九州産地や四国産地の残量入荷は潤沢であったが、月間全体では前年、平年ともかなり大きく下回った。</p> <p>価格は、品薄感から高値推移となり、後続産地の遅れから旬を追うごとに上伸を続けた。月間では前年を5割以上上回り、平年を5割近く上回った。</p>
土物類	さといも 	<p>愛媛産が中心となる入荷であった。輸入の中国産の単価高による入荷減の中で、国産需要が高まり、前年を上回る価格での推移となったが、量販店、業務関係ともに末端の荷動きは鈍く、発注量は少ない状況が続いた。旬を追うごとに入荷増傾向で、国産の入荷量としては前年を上回ったが、単価高のため積極的な荷引きとはならず、さといも全体の入荷量は少ない状況となった。月間全体では前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、前述の通り輸入の中国産の単価高と国産需要の高まりを受けて高値推移となったが、さといも自体の売れ行きが鈍いことにより、旬を追うごとに下落した。月間では前年、平年ともかなりの程度上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は北海道産の入荷で、上旬から中旬にかけては潤沢な入荷が続いたが、夏場の極端な気温高の影響に加え、北海道でも日中の気温が高い日が多く、発芽や品質低下が見られるようになり、下旬には産地出荷量が減少した。メークインも北海道産の入荷で潤沢な出荷であったが、丸芋同様に発芽の問題などがあり、販売先からのクレームなどで積極的な販売ができず、中旬以降は入荷減となった。ばれいしょ全体では前年をかなり大きく下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、比較的安定した推移であったが、品質低下品やクレームの影響により伸び悩んだ場面もあった。積極的な販売ができなかったことにより、入荷減に伴い旬を追うごとにわずかに上伸傾向となった。月間では、安値だった前年をかなり大きく上回り、平年並みだった。</p>
	たまねぎ 	<p>北海道産が中心となり、兵庫産の入荷もあった。北海道産は夏場の気温高や降雨の影響により生育不良となり、また、品質低下品も見受けられたことから、産地出荷量が当初の見込みよりも少なかった。積極的な販売ができなかったことから入荷減となり、中旬以降は前年を大幅に下回った。兵庫産は全旬とも産地残量が少なかった前年より多く、月間では2倍以上となった。輸入の中国産は、前年より単価安となった影響により入荷増となり、前年を大きく上回った。月間全体では前年をかなり大きく上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は、北海道産の品薄感から旬を追うごとに高騰し、兵庫産も影響を受けて高値推移となった。兵庫産は高値だった前年を大幅に下回った。全体では前年をかなり大きく上回り、平年を3割近く上回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした12月の見通し

東北産が全般的に早く切り上がり、関東産や西南暖地産が中心となってきている。果菜類は10月の底の時期を脱して11月は増えながら推移し、12月には平年並みに回復してくると予想される。キャベツやだいこんは暖冬により大幅に前進し、今後は採り遅れが懸念される場所である。この前進によって、年明けの2~3月の出荷が大幅に少なくなることも心配しなければならない。葉物野菜は、10月後半から11月にかけての晴天により生育は順調で、年末年始に大幅な値上がりはないと予想される。しかしながら、暖冬による前進により品薄となる不安があるため、価格は平年より堅調な展開が予想される。

根菜類



だいこんは、千葉産の現状はかなり遅れているが、年末には回復してくると予想される。時期をずらして蒔いており、欠株（発芽不良）した分は11月上旬には回復すると予想される。現状では雨が少ないが、肥大は問題ない。今後、価格が回復すれば、Lサイズ中心で出荷は進むと予想している。神奈川産の10月の早い作型の物はそれほど良くなかったが、11月の出荷物から回復すると予想している。12月はピークとなり、例年並みの出荷を予想している。当面は暖秋さらに暖冬予想から肥大は良く、2Lサイズが多くなると予想される。「三浦大根」は12月25・26・27日の販売を予定しており、作付けは前年を下回っている。静岡産はほぼ例年同様に12月から出荷が開始し、ピークは1~2月で、年内はそれほど増えることはないと予想している。作付けは前年並みである。

にんじんは、千葉産は播種時期の高温・干ばつによる遅れや、9月の降雨による蒔き直しの影響で少なめの出荷となっている。それでも11月20日過ぎから12月上旬に1回目のピークが来ると予想される。低温になると葉が枯れてしまい、機械掘りができなくなるため、年明けは少なくなると予想される。3月上旬まではまとまって出荷でき、切り上がるのは4月上旬

と予想される。埼玉産の出荷は例年と同様に11月中旬から始まるが、今年は干ばつのため発芽に苦労し、少ないと予想される。猛暑の影響により、期間を通して平年作を下回る可能性がある。出荷は1月まで続き、ピークは12月で、サイズはM・L中心と予想される。香川産は11月30日からの例年どおりのスタートと予想している（5キログラム箱は10月末から始まっている）。欠株（発芽不良）により作付けは59ヘクタールと前年の98%に減少している。12月25日売りで年内は終了し、年明けは全体の10%もなく、ほとんど年内販売が中心となる。高温下で肥大も良好で、サイズは2L・Lが中心である（品種は「金時人参」）。



葉茎菜類

キャベツは、愛知産の現状は平年並みまで回復してきており、生育は順調である。秋以降も高温が予想されているが、特別前進することはないと予想している。12月は相場を見ながらの出荷となり、サイズは引き続き8玉サイズ中心の前年並みと予想している。千葉産の現状は例年を下回る出荷となっているが、11月5日~10日頃には増え始め、平年並みに追いつくと予想される。12月は今後の気温次第であるが、雨が多ければ前進すると予想される。前年は前進により12月中旬から1月中旬まで少なかった。神奈川産は、干ばつの影響により定植が遅れ、11月までは欠株も見られた。その後蒔き直したことから、12月は平年並みで少なくなることはないと予想される。出荷開始時は小振りだが、肥大は徐々に回復すると予想される。

はくさいは、茨城産は11月中旬から例年並みに増えて来るが、定植時期に1カ月間雨が降らなかったこともあり、生育は10日程度遅れている。12月には前年並みとなり、4玉サイズが中心と予想される。

ほうれんそうは、埼玉産の播種作業は順調に行われ、気温も徐々に下がってきて平年並みの出荷となっている。11~12月の出荷はおおむね平準化されるが、12月上旬にやや減り気味となり、下旬にややピークが来ると予想して

いる。群馬産の9月の出荷はかなり少なかったが、10月に入り平年並みとなった。11～12月は例年と同様の出荷となり、播種作業も順調に行われている。12月は寒さに伴い減少傾向となり、ピークは11月下旬と予想される。

ねぎは、埼玉産は猛暑の影響により圃場によってはものが出来ていないところがあるが、11月中旬からは、太物が増えて品質も良くなり、12月には前年の90%程度まで回復すると予想される。千葉産の冬ねぎは、7～8月の高温や病気の発生により定植が遅れた。そのため例年より1カ月以上遅れて11月20日過ぎから出荷が始まると予想される。12月は前年をかなり下回ると予想される。茨城産は9月上旬まで続いた猛暑の影響により、現状は平年を下回る出荷となっている。11月下旬から回復に向かい、12月には平年並みに近づくと予想される。群馬産の「下仁田ねぎ」は平年並みに出荷が始まっているが、葉の損傷が見られ、肥大が例年より遅れている。出荷のピークは12月であるが、平年を下回ると予想している。

レタスは、静岡産の現状は夏の高温・干ばつの影響はなく、平年並みである。干ばつ傾向により、生育は順調であるが小玉傾向になる可能性がある。12月～翌1月がピークで、2月には減ると予想される。12月は暖冬で推移すれば例年より増加すると予想される。香川産は10月6日から始まったが、昨年より若干遅れている。現状は夜温が下がってきたため、全体としては大きな問題はない。それでも干ばつが続き過ぎたことにより、リーフ系を中心に葉が枯れて廃棄したものもあった。12月は前倒しも予想され、前年を下回る出荷の可能性もある。

果菜類



きゅうりは、宮崎産の現状は生育順調である。好天のため11月中旬から量が増えて、12月にピークが来ると予想される。11月に天候が崩れて12月の出荷が伸び悩んだ前年よりは、今年は上回る出荷と予想している。埼玉産の現状は害虫の影響が多いなど、例年を下回る出荷となった。11～12月は高温が予想されていることから、ある程度回復しても、樹勢の衰えか

ら例年を下回ると予想している。

なすは、高知産の現状は順調で、前年より多く出荷されている。新規就農者がいることから作付けが増えており、天候にも恵まれている。当面は11月中旬にピークを迎え、12月に入り少し減少するが、前年を上回ると予想している。福岡産の長なすは、現状は生育順調で平年をやや上回る出荷となっている。11月にピークが来て、12月はやや減るといった平年並みの推移が予想される。生産者は減少しているが作付けは減っていない。

トマトは、愛知産は11月中旬になってようやく平年並みに回復し、11月下旬にピークが来て、12月上旬にいったん減ると予想される。その後、中下旬には増えながら推移すると予想され、サイズはM中心の見込みである。熊本産の出荷の始まりは平年並みであったが、裂果の発生があるなど、売り物になるものが少なかった。現状は前進気味だが、今後は平年並みに回復すると予想される。11月10日頃まで増量し、中旬からは一定のペースとなり、20日過ぎには再び増えて12月には前年並みか上回る水準まで回復すると予想される。品種は「かれん」中心で、サイズはM・S中心と予想される。福岡産の現状は出荷開始時期だが、猛暑の影響により害虫の発生が多かった。品種は「桃太郎ホープ」で、12月に増えて1月まで多く、生育順調を予想している。M・Sサイズが中心で、平年を若干下回る出荷を予想している。

ピーマンは、宮崎産の現状は平年並みの出荷だが、今後は着果状況から判断すると例年より多くなると予想している。12月の出荷は天候次第ではあるが、平年を上回ると予想している。茨城産は抑制ものの秋ピーマンが中心である。8～9月は猛暑で花が落ちたり、変形果が発生したりしたために出荷量が減ったが、10月には気温が下がり平年並みに回復してきた。11～12月は日中の気温が高いと予報されていることから、着果も問題なく平年並みの出荷を予想している。

土物類



さといもは、埼玉産の今年は雨が少なく、やや生育環境が悪かったが、灌水できる圃場は生育順調である。豊作であった前年の80～90%程度の出荷と予想される。出荷は10月から始まっており、12月がピークと予想される。Lサイズ中心で、それより大きいサイズのものがない。

ばれいしょは、北海道産（今金町）の収量は前年より多く、豊作基調であるが、高温の影響により土壌中の発芽や腐りが見られる。サイズはL中心である。北海道産（めむろ）の主力の「メーカーイン」は平年作である。2月末までLサイズを中心に、平準ペースで出荷されると予想される。その他「マシルダ」「とうや」もある。長崎産の生育期は干ばつであったが、適度の降雨もあり、出荷は例年と同様12月に始まると予想される。干ばつが続くと、小玉傾向で形状も悪くなると予想される。作付けは前年並みで、品種は「ニシユタカ」を中心に「デジマ」「さんじゅう丸」「あいまさり」である。

たまねぎは、北海道産（きたみらい）は肥大不足の影響により例年よりも収量は少ない。Lサイズ中心であるが、12月の出荷は平年を下回ると予想される。北海道産（いわみざわ）は高温と雨不足の影響により、小振りの仕上がりとなっている。例年と同様に年明け3月までの出荷となるが、12月は例年を下回ると予想される。

その他



ブロッコリーは、埼玉産の現状は平年並みの出荷となっているが、11月中旬に一度ピークが来ると予想される。12月は平年並みの出荷を予想しているが、11月上旬前半に25度を超える気温高になったことで、12月出荷分が大幅に前進する可能性がある。

ごぼうは、熊本産の新ごぼうは生育初期の高温と少雨が影響し、例年の11月20日頃の出荷開始より7～10日遅れており、12月に入って

からと予想される。出荷のピークを年末に調整したいところであるが、少し後ろにずれて年明けもやや多い見込みである。

れんこんは、茨城産は大きめの仕上がりで、やや豊作傾向である。12月29日までピークが続き、12月は前年並みの出荷と予想している。夏の猛暑の影響はない。

かぼちゃは、輸入のメキシコ産が年末を迎え出回りのメインになる。最初のコンテナは11月末か12月初め頃入港すると予想される。入荷は12月中下旬がメインになり、輸入量は前年並みを予想している。産地はメキシコの太平洋岸ソノラ州にあるが、今年生育は順調である。品種は栗系の「007」で国内の品種ではない。サイズは一般的な5玉中心と予想される。円安の影響のほか国内産が少ないことにより、価格は例年より高めと予想される。

かんしょは、千葉産の収穫はほぼ終了した。猛暑・干ばつの影響はなく、平年作である。Lサイズ中心の肥大は平年並みで、年内は「シルクスweet」中心が予想される。徳島産の収穫量は平年並みで、前半の出荷は少なめであったが、後半に入り落ち着いてきた。12月が出荷のピークで、12月22日に出荷が終了する予定である。

いちごは、福岡産は現状までのところ、干ばつの影響により定植した苗の活着が悪く生育が遅れている。さらに病気の発生により苗が足りなくなったが、何とか回復している。12月中下旬の需要期には問題なく対応できると予想される。品種は「あまおう」のみで、作付けは前年並みである。栃木産は今年から、県下の品種構成が「とちあいか」が60%、「とちおとめ」が40%とこれまでと比率が逆転し、12月の出荷予想が難しい。早いものは10月5日から出荷が始まったが、12月の出荷は予断を許さない。全体の作付けは前年並みである。

くわいは、広島産は11月7日から全国出荷を開始する。試し掘りはまだであるが、地上部の葉の様子を見る限り順調で、高温障害もないと予想される。作付けは11ヘクタールと前年並みで、12月20日には販売終了すると予想される。

柚子は、高知産は12月に出荷が始まり、上旬にピークを迎えると予想される。22日を過

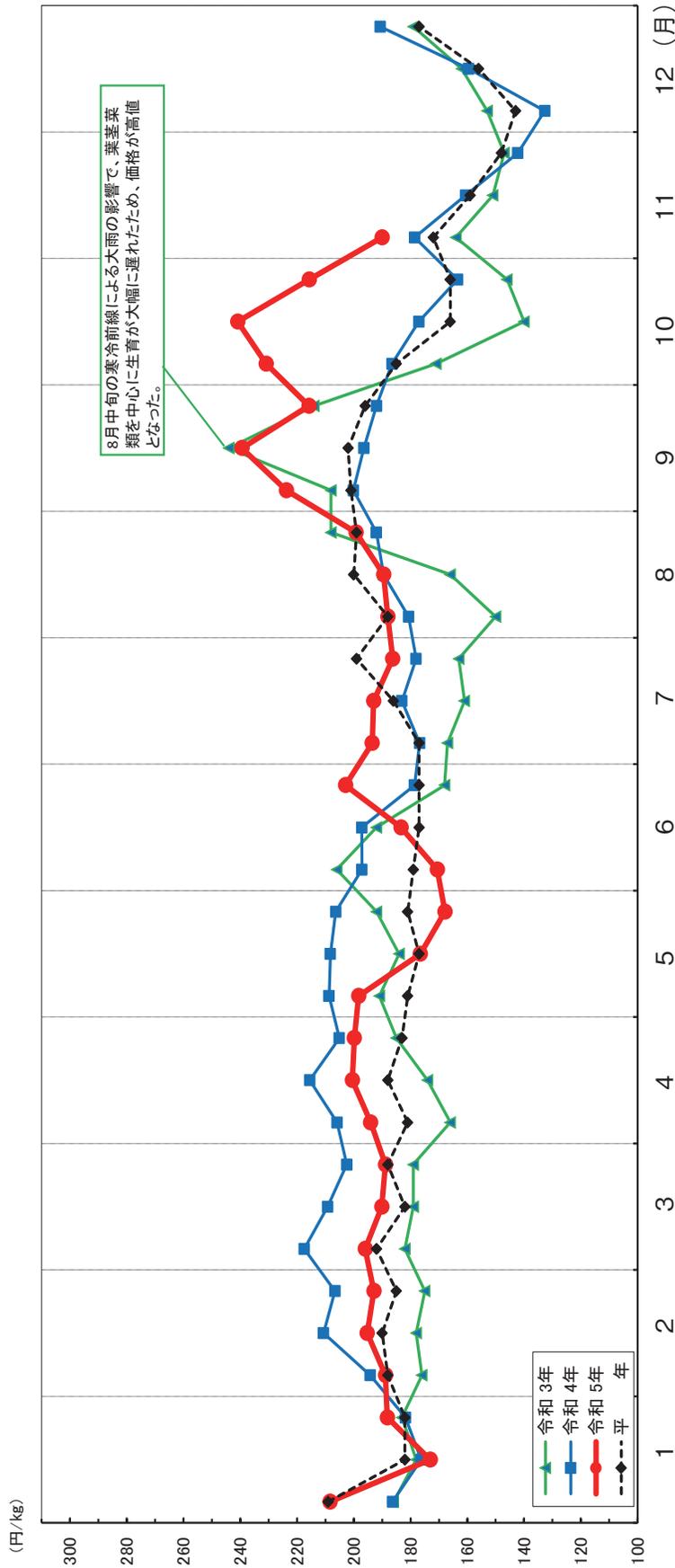
ぎると業務用の出荷となる。台風による減収もなく、順調である。特に東京市場に多く出荷され、スーパーなど一般の家庭向けが中心である。

ナバナは、千葉産の現状は例年と同様に始まっている。最大のピークは年明け2月であるが、12月は200グラム結束物と、100グラムパック物の出荷である。量的には例年を下回るが、正月商材としてまとまった出荷ができると予想される。

七草は、佐賀産は12月30日から出荷が始まり、東京市場では1月2日から売りが始まる。1月5日にパック詰め作業し、6日出荷で終了の計画である。現状七つの野菜の生育は順調である。

(執筆者：千葉県立農業大学校
講師 加藤 宏一)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

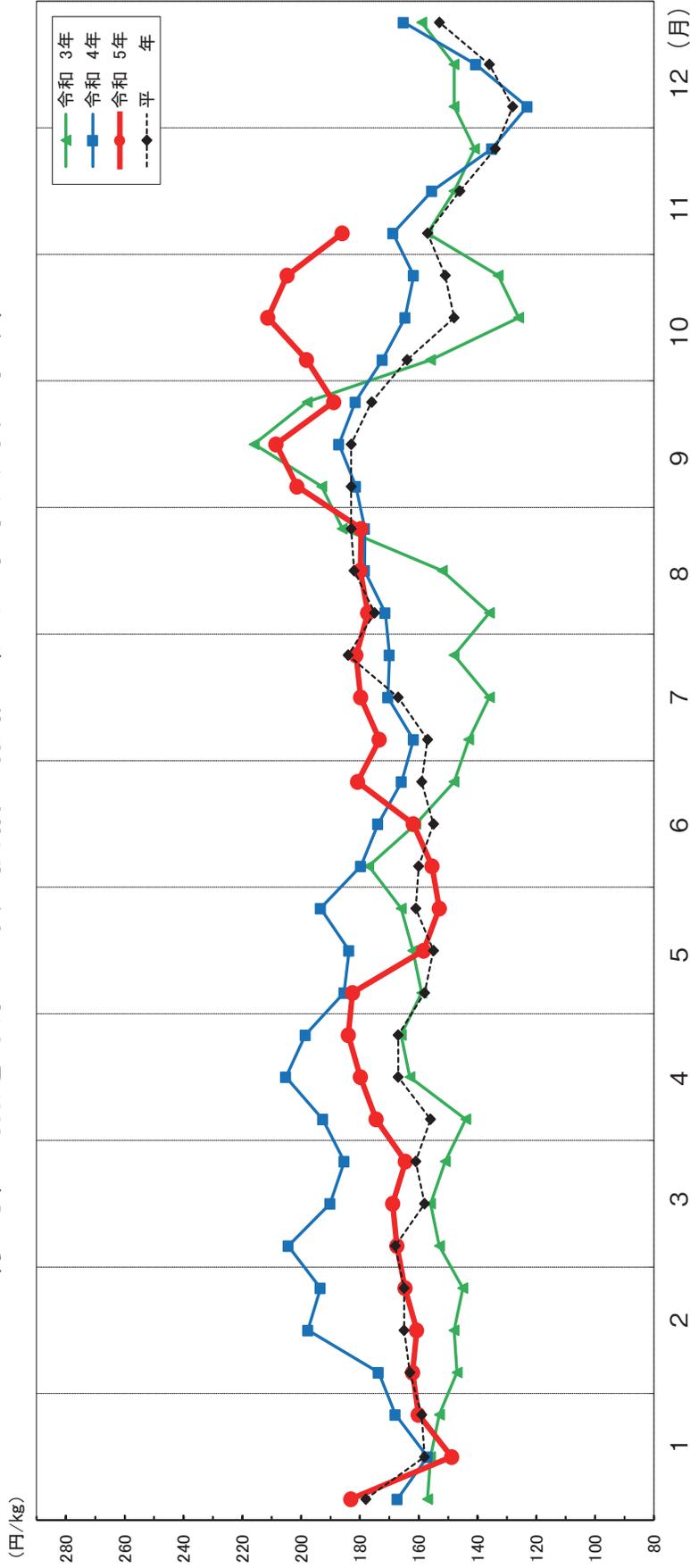
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月															
	上旬	中旬	下旬																																			
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	200	196	187	177	163	179	161	142	133	160	191
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190							
平年	209	182	182	188	190	185	192	182	188	181	188	183	181	177	181	179	177	177	186	199	188	200	199	201	202	196	185	166	166	172	159	148	143	156	177			

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月												
	上旬	中旬	下旬																																
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159		
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	201	209	189	198	211	205	186					
平年	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。